

優しくて完璧な年上彼氏の家に行ったら、
おもちゃで「ひとり遊び」を強制されて、
最後は生ハメ中出して意識飛んじやう話

金曜日の昼休み。休憩スペースのテーブルにお弁当を広げ終えたところで、スマホが小さく震えた。

(……理人さん、かな)

そっと画面を覗き込むと、思った通りの名前が表示されていた。

私は、周りに気づかれないようにスマホを膝の上に隠して、メッセージを開く。

『今週の土曜、よかったらうち来ない？ ご飯ご馳走するよ』

(……えっ)

心臓が、跳ねる。

（これって、お家、デートってことだよね……？）

短い一文なのに、指先まで熱が回った。頬が緩みそうになるのを必死で堪えて、私はお弁当箱の蓋を開けるふりをしながら、もう一度メッセージを読み返す。

倉内理人さん。

合コンで出会って、告白されて、付き合い始めて数ヶ月。何度もデートを重ねて、身体の関係もそれなりにある。それでも、彼の自宅に招かれるのは、初めてだった。

（下着、新しいの下ろそう……。あと、髪も、ちゃんと巻いて……。美容室、今から予約取れるかな……。？）

指先を震わせながら、短く返信を打つ。

『はい、嬉しいです。楽しみにしています』

送信したあと、絵文字を入れた方が可愛かっただろうか、と不安になった。何度か画面を見ていたけれど、返信はまだ来ない。理人さんは私よりずっと忙しい人だから、きっともう仕事に戻ったんだろう。

私はスマホを裏返して、お弁当の卵焼きに向き直った。

（理人さん、今は仕事に集中してるんだろうし、私もお昼食べて頑張ろう……！）
それで、夜でも空いてる美容室を探さないと……！）

——そう、自分に言い聞かせた矢先だった。

「遠野さん、ちょっといい？」

顔を上げると、上司の課長が困り顔で立っていた。その後ろには、涙目の後輩・佐々木くんがぺこぺこ頭を下げている。

「佐々木がさ、明日の午前中にクライアントに送る資料の数字、ちょっと間違えててね。急ぎで直したいんだけど、遠野さん、フォロー入ってもらえるかな」

反射的に、口が動いていた。

「あ、はい、大丈夫です。すみません、確認します」

謝る必要なんてないのに、いつも「すみません」から始まってしまう。課長はほっとした顔で「助かるよ」と笑い、佐々木くんは「本当にすみません、遠野先輩……」と何度も頭を下げた。

その中で、私だけが、蛍光灯の下でExcelの数字を追いかけていた。

(……この列、合計が合わない。あ、佐々木くん、ここ全部ズレてる……)

一つずつ、丁寧に。訂正して、確認して、また訂正して。

窓の外はもう真っ暗で、ビルの明かりだけがまばらに光っている。ふと視線を上げると、机の上でスマホが小さく光った。

『明日楽しみにしてる。今週もお疲れさま。明日はゆっくり過ごそうね』

理人さんからの短いメッセージ。それだけで、目の奥がじんわり熱くなる。

「もうお仕事終わったのかな……」

（理人さんなら、こんな時間まで残業なんてしないんだろうな……）

スマホの画面をぼうつと眺めた。

（……なんで、こんな私を、選んでくれるんだろう）

仕事は人並み。要領は悪い。断ることもできなくて、いつも誰かの後始末をしている。特別、可愛くもないし、話だって面白いことは言えない。

（理人さんの周りには、もっと素敵な人、たくさんいるのに）

きれいで、頭が良くて、話が弾む人たちが、彼のことを見ていた。あの合コンで、はっきりと見た。それなのに、どうして……。

(……ちゃんと、明日、可愛くしていかなきゃ)

そう思い、私は画面に向き直って、理人さんに短く返信をした。

『ありがとうございます。私も楽しみにしています』

残業を終えてやっとのことで会社を出ると、二十二時を過ぎていた。

「お疲れさまです……」

誰にともなく呟いて、私は駅までの夜道を歩く。金曜の夜の街は、酔った声とタクシーのクラクションで少しだけ賑やかで、自分の疲れを浮き上がらせた。

（結局美容室、行けなかったなあ……）

電車に乗り込み、空いた席にちんまりと腰を下ろす。窓に映る自分の顔は、化粧が半分崩れていて、目の下がうっすら暗い。

（……こんな顔で、明日、理人さんに会うのかあ）

こっふん、と窓に額を寄せる。ガタン、ゴトン、と電車の揺れに身を任せていると、瞼の裏に、ふと半年前の景色が蘇ってきた。

——理人さんと初めて会った、あの合コン。

『ねえ、お願い！ 一人だけ来られなくなっちゃって、人数合わせでいいから！ ほんとに、座ってるだけでいいから！』